カミダーリとチムグリサ

杉山 明伸（福祉学科教員）

ユタは沖縄などに琉球王国時代から存在する、霊的能力で大衆の相談にのる民間職能者です。一般的にはシャーマンとして扱われます。長く沖縄に住み、ユタと過去に接点があったと思われる高齢者に伺うと、「今はもういない」と言われる場合もあれば、「先日、引っ越しの際に祈ってもらった」と、実際にユタコーヤ（ユタと契約して頼みごとをする）された話を壮年者から、近年、聞いたこともあります。人心を惑わせる、怪しげな霊媒師として歴史的にタブー視・弾圧されていたことがありますので、あからさまに語るのは憚れるようですが、今なお、沖縄の生活の一部には厳然と影響力を及ぼしています。ユタには占い・祈祷・治療などの役割があり、沖縄では先祖祭祀関連だけでなく日常生活に困りごとが生じた時は、まずユタに相談するのが通例だった時期がありました。現在でも、沖縄における諸問題の相談相手としては、ソーシャルワーカーよりユタの方が認知度は高いのかもしれません。

昨年６月、卒業論文の資料収集のため沖縄を訪ねる学生たちに同行する機会を得ました。卒論のテーマにユタを含んだ学生がいたことから、その取材先の一つに、うるま市の精神科病院の理事長である髙江洲義英先生がいました。1982年、沖縄での位牌（トートーメー）の女性継承禁止にユタが関わっていたことなどを取り上げ、ユタのあり方を問うことになった学会で、髙江洲先生はユタを伝統文化の結晶であると捉え、共存・共感の必要性を唱えました。これが引き金となり『ユタ論争』へと発展した際には、批判的な見解を持つ人たちに対してほぼ一人で矢面に立つことになった人物です。

ユタにはユタになっていく過程（成巫過程）があると言われています。“サーダカウマリ”という生まれつき霊感が強かった人が、“カミダーリ”との幻覚・妄想などの状態を体験した後に回復し、自分を導く精霊を見つける“チヂアキ”を経てユタとなっていくというものです。詳細は学生がまとめられた卒論を参照していただくとして、髙江洲先生によれば、ユタになる人に一時的に現れる“カミダーリ”は心因反応であり、統合失調症の症状ではないとのことでした。

沖縄には“フリムン”など精神症状を表す独特の言葉が数多くあり、“カミダーリ”もその中に含まれます。「神懸かり」などとも表すように、「神の霊が憑依している」と解釈されてきました。私は学生時代から沖縄のハンセン病療養所を繰り返し訪ねていましたので、“カミダーリ”という言葉を耳にする機会は何度もありました。日本の精神病者への処遇は1900年の『精神病者監護法』などの影響もあり、座敷牢などに閉じ込め、社会から無きものとするのが主流でした。しかし、後に大橋英寿先生が沖縄社会は精神病者を隔離せず共同体の中に受け入れていると指摘されたように、私は沖縄では病者に対して非常に寛容に対処している印象を持っていました。沖縄に“ユイマール”という共生社会を意味する言葉があることは広く知られています。この精神から沖縄の人たちが精神病を患った人たちを神さま扱いすることでコミュニティから排除しないように、“カミダーリ”という言葉を病者に当ててきたのではないかと、私はずっと思っていました。

学生の髙江洲先生へのインタビューがひと通り終わった頃を見計らい、私は“カミダーリ”についての私の見解の是非を先生に問いかけてみました。髙江洲先生は首肯され、“カミダーリ”を特別な霊的素質のある人と見做し、沖縄の共同体の中で受け入れているのは確かにその通りであると答えられました。その方が社会的に意味ある存在となりますし、本人の自己評価も肯定的に保てる可能性があります。一方、統合失調症などと精神病であるとなれば、医学的管理が必要な状態として日常生活から切り離し、精神科病院の中で治療することになりかねません。そして、先生は、沖縄の文化には“チムグリサ（肝苦りさ）”など肝（チム）、つまり心を大切にする考え方が根づいているが、“チムグリサ”は他人の痛みを憐れむのではなく、自分のことのように思いやり、受け入れていくポジティブな捉え方で、このような“チム”などの沖縄の心の文化が“カミダーリ”にも共通していると説明してくださいました。

私が沖縄に通い始めた頃、サークルの先輩が「沖縄に行くのなら絶対に読めよ」と勧めたのが、灰谷健次郎の『太陽の子』でした。この本で私は“チムグリサ”を知りました。大学１年の春休み、ふと思いついて訪ねた沖縄・愛楽園で出会った人たちの自己提供的で開放的な心情に魅せられ、その背景と歴史を知りたくて社会福祉を学び始めました。そして、ソーシャルワーカーを志し、縁あって精神科病棟で働き始めることができ、患者・家族に少しでも役に立つソーシャルワーカーになれるように努めてきました。沖縄でも座敷牢に閉じ込められた病者がいたことを証言する人もいますので、客観的に実態を検証する必要がありますが、髙江洲先生の言葉は私の積年の疑問への答えとなっただけでなく、学生時代から取り組んできたことと現在を一気に結び付けてくださいました。私なりに一石ずつ築いてきたことにも意味があったと感じられた瞬間にもなりました。６月の平日に日数をかけて沖縄まで出かけていくことは通常ではありえません。取材目的の学生たちが同行を許してくれたお陰でもありますが、この感傷的な出来事は研

究休暇をいただけたからこその成果だったと感謝しています。

【参考文献】

大橋英寿（1998）『沖縄シャーマニズムの社会心理学的研究』．弘文堂
塩月亮子・名嘉幸一（2002）「「肯定的狂気」としてのカミダーリ症候群――心理臨床家を訪れたクライアントのケース分析――」．日本橋学館大学紀要第１号
富川亜紀子（2005）「ソーシャルワークとクライエントの相違の解決に向けたアプローチ～ユタに通うクライエントの事例を通して～」．沖縄大学
灰谷健次郎（1979）『太陽の子』．理論社
濱雄亮（2010）「足枷から資源へ――ユタ評価の重層性――」．サイバー大学紀要第３号
藤崎康彦（1996）「沖縄文化とサーダカウマリ」．跡見学園女子大学文化学会第14号
宮谷愛結実（2017）「「幻覚」「妄想」の肯定的側面についての考察～イマジナリーコンパニオンと沖縄のユタの例をもとに～」．立教大学